

## Bastard Faulconbridge について

—*King John* と *The Troublesome Raigne of King John* との比較的考察—

英文学教室 岡 村 俊 明

*King John* (以下 *KJ* と略す) の Bastard Faulconbridge について考えてみたい。Holinshed などによるわずかな “trifling variations” を除いては、*KJ* の原典<sup>①</sup> は *The Troublesome Raigne of King John*<sup>②</sup> (以下 *TR* と略す) であるといえる。本論では、Shakespeare の Bastard はどういう人間か、*TR* との関連のもとに、考察してゆきたい。

Bastard の全体像を考えるさいに必要なってくるので、最初に *KJ* のテキストの問題を取り上げよう。このテキスト (the First Folio) には多くの矛盾がある。明白な間違いのみを例示しても次の通りである。

act and scene division について。二幕はわずか76行から成り立っているにすぎない。この幕にはる人が登場していたが、“Exeunt” も与えられないままに新しい幕が始まる。この幕の区切りは非常に不自然だといえる。また四幕一場は2つある。後に出てくるのが五幕一場の間違いであるといつてよい。

stage direction について。これも非常に不完全である。明白な間違いのみを例示しよう。

1. (1. 36)<sup>③</sup> Exit Chat. and Pem. Exeunt に正すべきであろう。
2. (1. 232) SD. Enter Lady Faulconbridge and Iames Gurney これは 1.230 に続くべきであろう。
3. (1l. 292-3) Enter before Angiers, Philip King of France, Lewis, Daulphin, Austria, Constance, Arthur. Lewis と Daulphin は同一人物である。
4. (1. 996) Constance, Arthur, Salisbury に Exeunt が与えられていない。
5. (1. 1296) 複数の人が退場するが Exit となっている。
6. (1. 1648) なんのと書きもない。Hubert が “strike [his] foot” し、刺客が登場しているはずだが。
7. (1. 1662) *Exec.* I am best pleas'd to be from such a deede.  
*Art.* Alas, I then haue chid away my friend.

Arthur の科白の前に、刺客が退場しているはずだが、なんのと書きも与えられていない。

8. (1. 1880) *Iohn.* Deliver him to safety, and returne,  
For I must vse thee:  
(1. 1905) S.D Enter Hebert

① “The principal source was *T. R.* which is followed pretty closely as regards historical events, the selection of scenes, and even the logical run of many of the dialogues.” E. K. Chambers, *William Shakespeare* (London, Oxford Univ. Press, 1930), p. 367.

② テキストは Geoffrey Bullough(ed.), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, IV (London, Routledge and Kegan Paul, 1962) 用いた。

③ Norton Facsimile の line-number による。Charlton Hinman (prep.), *The First Folio of Shakespeare* (New York, W. W. Norton & Company, Inc., 1968)

Hubert は王の命令通り退場し、再登場する。しかし 1.1880 で Exit は与えられていない。

9. (1. 2003) ト書きはない。また 1. 2005 で Arthur は死ぬが、城壁から飛び降りる際にも見当たらない。

10. (1. 2033) Salisbury が Arthur の死体を見つけるのだが、ト書きはない。

11. (1. 2164) SD. Exit. Exeunt となるべきであろう。

12. (1. 2370) *Dol.* What lusty Trumpet thus doth summon? ここにもト書きはない。

13. (1. 2616) *Hen.* Let him be brought into the orchard heere? ト書きはない。John 王を連れてくるため、Bigot が退場するのだが。

14. (1. 2674) ト書きはない。(1. 2675) に “*Sal.* You breath these dead newes in as dead an eare.” とあるから、1. 2674 で John 王が死んだはずだ。

以上は初歩的で確定的な間違いである。高度の判断を必要とするのは、これより遙かに多いといえる。

heading について。Queen Mother は Elea., Eli., Ele., Queen, Qu. Mo., Old Qu. と七通りに書かれている。King John, Hubert, King Philip などについては、Queen Mother の例ほど多くはないが、幾通りもの heading で書かれている。Bastard は初めは Philip で登場する。獅子王の庶子として認められると、Bastard (1. 146) となり、それ以後この heading が与えられている。しかし 1. 998 のト書きで Philip が使われ、ll. 1057, 1059 でも Philip が使われている。ll. 294, 311 では Lewis とあるのは、K.Philip の間違いであろう。1. 449 で King Lewis, determine what we shall do strait. とあるが、King Lewis は存在していない。

またこれら以外にもこのテキストには多くの誤謬を含んでいる。どの研究者にも指摘されているが、Hubert と Citizen の問題、John 王の命令の問題 (Arthur 暗殺の命がいつのまにか彼を盲目にする命になっている) などである。また劇的効果から考えても不自然な要素が多い。特に伏線の欠如は著しいといえる。大きい役割をはたした二人の女性の突然の死、John 王の二度の戴冠式の経過、Daulphin とフランス王の役割の変遷、John 王の死後の Prince の役割、貴族たちが赦された経過等はその例に当る。既述した矛盾は明白なものばかりであるが、それは高度な判断を要する矛盾と違い、読者の主観によって左右されるものではない。この作品のテキストの乱れは Shakespeare の他の作品と比べても、遙かに多いといえる。

以上のことから言えるのは、多くの明白な矛盾が矛盾のまま放置されていることである。

次に Bastard に焦点をあてて、*KJ* と *TR* とを比較しよう。まず Philip を獅子王の庶子として認める個所を考えたい。*TR* で Robert は次のように言う。

look but on Philip's face,  
His features, actions, and his lineaments,  
And all this Princely presence shall confesse,  
He is no other but King Richards Sonne. (I. 168-71)

Robert は Philip の父は獅子王であると主張している。これを John 王も Elinor も認めたがらない。これに反して *KJ* では、Elinor も John 王も彼の顔つきを見るや、獅子王の子だと断定する。

(*Elinor* He hath a trick of Cordelion's face,  
 The accent of his tongue affecteth him:  
 Do you not read some tokens of my son  
 In the large composition of this man?  
*K. John.* Mine eye hath well examined his parts,  
 And finds them perfect Richard. (I. i. 84-90) <sup>(1)</sup>

J. D. Wilson はこれを “a great improvement”<sup>(2)</sup> だと述べている。

Shakespeare が手を入れているところに、次のものもある。Bastard が生まれたのは, “six weeks before the account my Father made.” (TR) である。Sir Robert Fauconbridge は自分の不在の期間と Philip の生まれた日を計算すると、どうしても6週間あわないと考えている。だから妻のもとに通っていた獅子王の子であると思う。KJ では14週間前に生まれたことになっている。Sir Robert Fauconbridge の子でないことをもっと強めようとしたからである。また Shakespeare は Robert の父が死ぬまぎわに “That this my mother's son was none of his” という遺書を残したが、これは TR にはない。Shakespeare は14週間早く生まれたとか、それを更に強める遺書のこと、Philip が獅子王の庶子である事実を確実にしたい意図があるようである。

Bastard が領土を捨てて、獅子王の庶子と自ら認める個所を考察しよう。TR で Philip の父について、彼は三度尋ねられる。儀式めいたことであるが、三度まで Fauconbridge の子だと言いはると、その子としておおよげに認められる。二度まで獅子王の庶子を否定したが、最後に次のように述べる。

PHILIP Please it your Majestie, Sir Robert-  
 Philip, that Fauconbridge cleaves to thy jawes:  
 It will not out, I cannot for my life  
 Say I am Sonne unto a Fauconbridge. (I. 270-73)

“Sir Robert” まで言って思いとどまり、獅子王が彼の父だと言う。それほど未練がましく思っていた。勇気がいったのだ。John 王が次のことをいっているのをみてもわかる。

Then Philip blame not me, thy selfe has left  
 By wilfulnesse, thy living and thy land. (I. 285-86)

KJ でも Bastard は相続権に執着はあった。<sup>(3)</sup> しかし TR と比較すると思いきりよく手放している。

Shakespeare は Philip が獅子王の庶子だと TR より明確に認めようとした。そのために6週

① テキストは J. D. Wilson (ed.), *King John* (Cambridge University Press, 1954) である。

② Ibid., p. 101.

③ Cf. I. i. 132-33, 138-47.

を14週間にし、*TR*になかった遺書の問題を出して、またその庶子になりたい彼の気持を押し出して、その証拠を固めているといえる。そして劇的效果をより高めるために、*Elinor* と *John* 王が自主的に彼を認めるよう *Shakespeare* は骨をおっている。

次に *Shakespeare* はどんな *Bastard* を作ろうとしたか、考察してみよう。*TR* では名誉心の強い *Bastard* が描かれているが、それを迎ろう。*Philip* は *Faulconbridge* の相続権を捨てて、獅子王の庶子になるが、*TR* と *KJ* ではそれぞれどのように描かれているのだろうか。

*TR* では *Philip* の心の中には大きな葛藤があった。

How are thy thoughts ywraapt in Honors heaven?  
 Forgetful what thou art, and whence thou camst.  
 Thy Fathers land cannot maintaine these thoughts,  
 These thoughts are farre unfitting *Fauconbridge*: (I. 257-60)

彼には強い名誉心があった。同時に相続権を失いたくないという気持も強かった。

Wilt thou upon a frantic madding vaine  
 Goe loose thy land, and say thy selfe base borne?  
 No, keepe thy land, though *Richard* were thy Sire,  
 What ere thou thinkst, say thou art *Fauconbridge*. (I. 265-68)

しかしついに彼は領土を捨てる。

Let land and living goe, tis honors fire  
 That makes me sweare King *Richard* was my Sire.  
 Base to a King addes title of more State,  
 Than Knights begotten, though legitimate. (I. 274-77)

それは名誉心のためであったといえる。心の中で悩んだが、相続権より名誉心のほうが勝を制したわけだ。

*KJ* ではどのように描かれているのだろうか。彼が相続権を手放すのは思いきりがよい。一人残されて独白をする時、獅子王の庶子となった今は、どのように人と応対しようか、挨拶はどうしたらいいのか、思いめぐらせている。

A foot of honour better than I was,  
 But many a many foot of land the worse....  
 Well, now can I make any Joan a lady.  
 'Good den, Sir Richard!'- 'God-a-mercy, fellow'-  
 And if his name be George, I'll call him Peter;  
 For new-made honour doth forget men's names. (I. i. 182-87)

相続権を失なったことも言及しているが、獅子王の庶子と認められた喜びが、それよりもっと強いといえる。こういう喜びにあふれた空想がしばらく続いた後で、彼は次のように述べる。

But this is worshipful society  
And fits the mounting spirit like myself. (I. i. 205-6)

この決断の原動力は、彼の名誉心と「高きを望む精神」であるといえよう。彼の葛藤は *TR* に比べて弱く描かれているといえるが、それは名誉心を重んじる彼を、もっと強く押し出すことにもなっている。

*Bastard* のある面を *Shakespeare* が時として削除している。*TR* では獅子王の庶子との告白をし、*Bastard* は母と二人になり、彼の実の父を問いただす。母は口を閉して言わない。すると、

And here by heavens eternal lampes I sweare,  
As cursed *Nero* with his mother did,  
So I with you, if you resolve me not. (I. 369-71)

本当のことを言わなければ、*Nero* のように母を殺すと威喝する。こういう *Bastard* の野蛮な面は削除されている。<sup>①</sup>

次に *Blanch* の結婚について。*TR* で *Bastard* は *Blanch* の結婚に反対する。彼は *Blanch* の命じた通り、*Lymozes* が身につけていた “*Lyons skinne*” をとり、彼女の愛を得ていたからである。それが突然降ってわいたような *Lewis* と *Blanch* の政略結婚に反対する理由であった。しかし *Shakespeare* はこの反対理由を取除いている。

*K7* を注意してみよう。*Blanch* の夫となる *Lewis* が彼女を誉称えているのを聞いて、次のような悪口を言う。

Drawn in the flattering table of her eye,  
Hanged in the frowning wrinkle of her brow,  
And quartered in her heart, he doth espy  
Himself love's traitor. This is pity now:  
That hanged, and drawn, and quartered, there should be  
In such a love so vile a lout as he. (II. i. 504-9)

しかしその前に彼は両軍に戦をさせようとやっきになっている。

Ha, majesty! how high thy glory towers,  
When the rich blood of kings is set on fire!  
O, now doth death line his dead chaps with steel,

① 後で *Bastard* は修道院から財宝をまきあげるが、この場面も削除されている。この理由は単一のものでなく、種々のものが考えられる。

The swords of soldiers are his teeth, his fans,  
 And now he feasts, mousing the flesh of men,  
 In undetermined differences of kings....  
 Why stand these royal fronts amazed thus?  
 Cry 'havoc!' kings, back to the stained field,  
 You equal potents, fiery-kindled spirits!  
 Then let confusion of one part confirm  
 The other's peace; till then, blows, blood, and death! (II. i. 350-61)

彼は名誉心のために戦いがしたいのである。彼の言葉づかいにもっと注目しよう。

Then in a moment Fortune shall cull forth  
 Out of one side her happy minion,  
 To whom in favour she shall give the day,  
 And kiss him with a glorious victory. (II. i. 391-94)

Bastard は戦争を壮大なものだと考えている。このために恋のはらいせといった個人的理由を、Shakespeare は削除したと思われる。

次に Bastard と Austria の口論について考察を加えよう。TR では Bastard は Austria と戦いたくてたまらない。それは次の理由によるといえる。

I level at thy head,  
 Too base a ransome for my fathers life.  
 Princes, I crave the Combat with the Duke  
 That braves it in dishonor of my Sire. (I. 924-27)

Austria のこういった口論は TR では連続した一ヶ所だけに出てきている。KJ では何ヶ所かに散在している。しかし Austria に事あるごとにたてつく。<sup>①</sup> 彼と戦い、殺し、父の名誉をはらしたくてたまらない。TR にある趣旨を Shakespeare は KJ でも生かしているといえる。

John 王が Pandulph に降参するが、そこはどう描かれているのだろうか。TR で John 王は逡巡している。彼は Arthur の死や貴族達の寝返りは既に知っている。しかしフランス軍が上陸したとの報せを受けると、堪えきれず彼は Pandulph に降参する。その後 John 王は Pandulph から王冠をいただく。Bastard はその場に居合わせ、皮肉たっぷりに次のように述べる。

A proper jest, when Kings must stoop to Friers,  
 Neede hath no law, when Frier must be Kings. (II. 639-40)

Pandulph が Lewis と John 王を和解させようとする。同席していた Bastard は Pandulph

① III. i. 130-33, 219-20, 298-99.

の後押しをする。

Lewis is but the agent for the Pope,  
Then must the Dolphin cease, sith he hath ceast. (II. 687-88)

しかし Pandulph の調停が失敗すると、はじめて Bastard は強い態度にでる。

curse the Cardinal,  
Betake your self to armes, my troupes are prest  
To answeere Lewes. (II. 710-13)

*KJ* では次の通りである。Pandulph の手から John 王は戴冠する。そして Pandulph は和解工作のため、その場所を去る。すると Bastard は入れ代り登場する。彼は Lewis が上陸したと、Dover Castle 以外、すべてが降参したこと、Arthur が死んだことなど悪い報せを一度に告げる。王は落胆し、悲しそうな顔をする。Bastard は王を励まし次のことを言う。

Be great in act, as you have been in thought;  
Let not the world see fear and sad distrust  
Govern the motion of a kingly eye:  
Be stirring as the time, be fire with fire,  
Threaten the threat'ner, and outface the brow  
Of bragging horror. (V. i. 45-50)

また Pandulph に降参したことを聞くが、それには強く反撥する (“O inglorious league.” V. i. 65)。その理由は

Shall we, upon the footing of our land,  
Send fair-play orders and make compromise,  
Insinuation, parley and base truce  
To arms invasive? (V. i. 66-68)

“arms invasive” に対して和解はけしからんというわけだ。彼は Lewis と Pandulph のもとへ行く時、事態の如何にかかわらず、和解をおちこわす算段であった。

両者を比較すると、次の差異があることに気がつく。*TR* で Bastard は、Cardinal やフランス軍に対して挑戦的になるが、それは土壇場になってからである。それまでは皮肉な態度しかとらなかつた。*KJ* でははじめから挑戦的で、勇猛心にあふれ、侵略軍に対しては断固戦う姿勢を持っている。Bastard の勇壮さは *TR* に比べて強められているといえよう。

Shakespeare は終始一貫して彼を引き立てている。Elinor は一時フランス軍に捕えられる。*TR* では John 王が彼女を助ける。*KJ* では Bastard が助ける。*TR* では貴族達を連れ戻す役

(失敗はしたが)は Hubert である。KJ では王の命を受けて、Bastard が彼らを連れ戻そうと画策する。王の信がそれだけ厚いことになる。勇気りんりんとした性質は次のものもある。Hubert は Bastard に会い王の臨終を知らせようと思うが、ためらっている (KJ)。すると彼は

Show me the very wound of this illness  
I am no woman, I'll not swoon at it. (V. vi. 21-22)

と凄む。なお TR では Bastard は王のそばにいる。  
KJ で臨終の真際に Bastard が急ぎ登場する。王は彼を心待に待っていた。

O cousin, thou art come to set mine eye:  
The tackle of my heart is cracked and burnt,  
And all the shrouds wherewith my life should sail  
Are turned to one thread, one little hair. (V. vii.51-54)

王は生死の境目にいた。それでも Bastard はフランス軍が上陸したこと、味方の軍勢は大部分洪水に流された凶報を告げる。とたんに王は死ぬ。こういう時最悪の報せを言う必要はないではないかと思いたくなる。TR でも悪い報せを告げるが、王の態度は少し異なっている。

What news with thee? If bad, report it strait.  
If good, be mute, it doth but flatter me. (II. 806-7)

KJ の Bastard は勇気の前に馬鹿がつくほどである。  
最後の科白は有名であるが、それを考察しよう。

TR Let *England* live but true within it selfe,  
And all the world can never wrong her State.  
*Lewes*, thou shalt be bravely shipt to France,  
For never Frenchman got of English ground  
The twentieth part that thou hast conquered.  
*Dolphin*, thy hand: to *Worster* we will march:  
Lords all, lay hands to beare your Soveraigne  
With obsequies of honor to his grave:  
If *Englands* Peeres and people joyne in one,  
Nor Pope, nor *Fraunce*, nor *Spaine* can doo them wrong. (II. 1187-96)

KJ O, let us pay the time but needful woe,  
Since it hath been beforehand with our griefs...

This England never did, nor never shall,  
Lie at the proud foot of a conqueror,  
But when it first did help to wound itself...  
Now these her princes are come home again,  
Come the three corners of the world in arms,  
And we shall shock them: nought shall make us rue  
If England to itself do rest but true. (V. vii. 110-18)

TR では Pandulph (かつては John 王が降参したローマ教皇使節) と Lewis (John 王と戦っている相手) を前にして言われた科白である。そしてフランス側がイギリスの領土を獲得したこと、および Dolphin との和解がほのめかされている。KJ ではその場面に Pandulph も Lewis もいない。この科白のなかに Dauphin のことも言及されていない。余分なものは一切排除されている。そして愛国心にみちあふれた Bastard の姿は強まっている。乱れた国をまとめて、中心となって国を守る、勇壮な Bastard は強められている。

Shakespeare は Nature の作家であるといわれている。「造化に鏡捧げて…有りのまゝを写して見する」態度を彼はもっている。ここでもその例にもれず原典である TR を極めて大切にしている。よく似た科白は非常に多い。<sup>①</sup> それにもかかわらず TR の Bastard とは多少違った人間を作り出している。Bastard が獅子王の庶子だと認める個所は、TR よりもっと客観的な根拠を考え出している。高貴で、高きを望む精神に満ちあふれ、戦闘的である Bastard は TR にもある。しかし Shakespeare はそれをさらに拡大している。時として TR より彼を引き立てている。また勇壮で、その性質の延長点ともいえる蛮勇の人間を作り出している。こういう姿は劇の初めから終りまで一貫して見られる。そしてこれが彼の最後の科白と結びついている。この科白を Shakespeare は大切にしていると思うが、Shakespeare が考えていた彼のイメージを、この点に集約しているといつてよい。

Bastard について考えてきたが、この姿と相容れない次の三つの科白がある。

1. Madam, by chance but not by truth, what though?

Something about, a little from the right,  
In at the window, or else o'er the hatch:  
Who dares not stir by day must walk by night,  
And have is have, however men do catch:  
Near or far off, well won is still well shot,  
And I am I, howe'er I was begot.

2. For he is but a bastard to the time

That doth not smack of observation.

① E. K. Chambers, op. cit., p.367, "Only one line (V. iv. 42) is in common, but in some 150 places a few words from T.R. are picked up and used, by no means always in the same context."

And so am I, whether I smack or no:  
 And not alone in habit and device,  
 Exterior form, outward accoutrement;  
 But from the inward motion to deliver  
 Sweet, sweet, sweet poison for the age's tooth-  
 Which, though I will not practise to deceive,  
 Yet, to avoid deceit, I mean to learn;  
 For it shall strew the footsteps of my rising.... (I. i. 207-15)

3. Mad world! mad kings! mad composition!

.....  
 And why rail I on this Commodity?  
 But for because he hath not wooed me yet:  
 Not that I have the power to clutch my hand,  
 When his fair angels would salute my palm,  
 But for my hand, as unattempted yet,  
 Like a poor beggar, railleth on the rich:  
 Well, whiles I am a beggar, I will rail,  
 And say there is no sin but to be rich;  
 And being rich, my virtue then shall be  
 To say there is no vice but beggary:  
 Since kings break faith upon commodity,  
 Gain, be my lord, for I will worship thee. (II. i. 561-98)

三つとも同じ特色をもつ科白である。TR ではこれに該当する Bastard の科白はない。<sup>(1)</sup> この第一と第二の科白の特色は proverbial な言葉を使っていることである。諺を拾い出すと次のものがある。

W456 To come in at the windor (o'er the hatch)

H256 Have is have.

T420 To have a sweet (wanton) tooth.<sup>(2)</sup>

Bastard は軽やかな馴れた態度で、諺をおりませながら言っているわけだ。しかし軽やかな装いの下には、“I am I”などにみられる、冷徹な個人主義者の姿がある。また appearance と re-

① J. D. Wilson (op. cit., p.130) は次のように述べている。“But though there is no B. 's speech in T. R. three lines which that text gives to Constance, viz.:

Why how now Lords? accursed Citizens  
 To fill and tickle their ambitious eares,

With hope of gaine, that springs from Arthurs losse.

evidently offered Sh. a hint which he expanded into 37 lines on 'tickling Commodity.'”

② M.P. Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the 16th and 17th Centuries*, (Ann Arbor, U. of Michigan P.,1950)

ality のはなはだしい差異があり、利益を追い続け、そのみで動く人間の姿がある。

この三つの科白から考える限り、Bastard は Shakespeare の他の作品に登場する Richard III や Edmund とよく似た人間であるといえる。J. F. Danby や Ronald Berman はこれを New Man と名づけ、Bastard もこの範ちゅうに入るとしている。

しかし大きく異なるところがある。Richard III も Edmund も自分の reality はこうだと繰返し独白、傍白で示し、かつ行動でそれを裏づけている。またそれは劇全体を通じてみられる。観客の誰の目にも、その姿ははっきりしている。

K7 の Bastard はそうではない。劇全体で三つの科白しかない。しかも二幕の最後で消えている。この三つの科白以外に、彼が New Man だと証明する資料は全然ないといえる。独白、素振、行動においてもこの三つの科白とは全然違う。TR との関連において既に見てきた通りである。庶子の身分とその疎外された状況からして、劇の前半に作者は、Richard III や Edmund のような人間を創造する好機だと、判断したかもしれない。というのは第三番目の独白 “kings break faith upon commodity” で、正義をいつも口にし、そのじつ利益を軸に動く王侯達をいっているが、このテーマは劇の最後まで続く。これは appearance と reality の違った、利益のみで動く男の恰好の舞台であるともいえる。しかし Bastard のこの科白以後 Shakespeare は New Man に特色的な、同様の科白、素振、行動を彼に与えていない。New Man のイメージは立消えてしまう。どうしてこれは発展しなかったのだろうか。

この劇には我々が既に見てきたように act and scene division や stage direction の不完全さ、heading の間違いなど実に多くの矛盾がある。また劇的效果から考えても不自然な要素が多い。この三つの科白も Shakespeare の他の矛盾と同様に矛盾のまま残されていると考えるべきではないだろうか。<sup>①</sup> Bastard の全体像は既述したように、高貴で、高きを望む精神にみち、勇猛心にあふれ、国を思う男である。これが劇全体に貫かれており、この姿と New Man が同居できないと Shakespeare は判断し、さりとて調整もせず、矛盾のまま放置しているのではないだろうか。テキストの多くの矛盾と同様に、そう考えるべきではないだろうか。

① J. D. Wilson (op. cit., p. xlviii.) は第2, 3の科白は second revision の時、書かれたかもしれないと述べている。しかし特定の少数のもののみがその対象になっているのは奇妙だ。

